ふれあい文化の祭典　兵庫短歌祭　受賞作品

☆五国短歌大賞

150　サッカーの少年達は夕暮れを使いきるまで声を弾ます　姫路市　岸本万由美

☆兵庫県知事賞

134　山寺の鐘のひびきを耳深くしまひて発ちぬふるさとの駅　姫路市　生田よしえ

☆兵庫県議会議長賞

19　縁側に母の話をはじめてのふりをして聞く　猫とわたしと　多可郡　松下　孝裕

☆兵庫県教育委員会賞

240　暑いけど元気にしとうか母の声聞こえるような白桃一箱　高砂市　磯川　典子

☆（公財）兵庫県芸術文化協会賞

155　靴底につち踏む感触ぎゅっぎゅっと人工関節わがものになる　神戸市　乾　外志

☆神戸新聞社賞

71　孫に縫う蝶の模様のワンピース　ミシン踏むたび春が広がる　朝来市　高橋久美枝

☆兵庫短歌祭実行委員会賞

55　手押し車に体を預け歩みくる老女に道をゆづられてをり　たつの市　阿部　綾子

☆兵庫県歌人クラブ賞

65　誰も居ぬ実家を後にする時に隣りの媼は小さく手を振る　朝来市　田畑　洋子

236　立ち替り子らが漕ぎたるブランコの熱(ほて)りを冷ます春の夜の雨　神戸市　山本みさよ

254　今日もまた化石のような爺ちゃんの話し聞かさるお盆の帰省　東京都　伊藤　凛音

☆入選

9　待ち伏せをされしは辻のお地蔵さん腕白少年も征きて還らず　洲本市　浜　悦子

35　天の川を横切るのならクロールより横泳ぎでせう星をすくつて　姫路市　芦田　礼子

42　たれ込めるうすねず色の曇天をくすぐるように合歓の花咲く　加西市　前田　律子

61　仰向けに骸となりたるこの蝉は入道雲を見たであろうか　朝来市　今村　明美

145　率いられ雪に並びて英霊を迎えし駅も夏草に朽つ　神崎郡　青田　綾子

165　今日果つる命もあると思いつつ鈴虫の音を枕辺に聞く　丹波市　秋末佐惠子

175　手放せし実家の前を通る道避くるがならひとなりて年経る　加東市　林　茂代

187　四世代の賑わい嵐のように去り広き三和土にぽつり一足　豊岡市　大場　隆司

☆佳作

28 なつぞらに飛行機雲が交差して私に向って大きな×を　神崎郡　藤原　信吾

62 時として悪口を言う唇を紅く装う悪びれもせず　相生市　釜地　順子

72 太陽をたたえる如くカンナ立つもう似合わない夏がまぶしい　西宮市　松田千賀子

80 穴子を焼く男の鉢巻の真新し　あなごちりちり焼けてゆく音　姫路市　左川　恵子

82 包み紙が四角であれば無意識に鶴を折りいる両手の指が　朝来市　下村三千代

108 国を愛し働きゐるやベトナムの歌がながるる鉄工所にて　加西市　宮﨑　要子

115 階段を二段とばしで登る子ら日本の空は明日も青い　姫路市　瓦井美智子

136 歩かねば歩けなくなる作らねば作れなくなる短歌のやうに　姫路市　秋本　多恵

138 時告ぐるチャイムの音色は夕暮れの茜に染まり峡に溶けゆく　豊岡市　岸田美知子

153 二人暮しの独りの時間しみじみと吾がために淹れる熱き珈琲　加古川市　鎌谷　克子

172 温もりの無きセルフレジ利用せず吾は並ばむ君いるレジに　神戸市　竹中　丈夫

178 目をとじて非戦を誓う八月に「戦う覚悟」持てという声　明石市　吉見顕太郎

194 虚空に舞う銀の一閃友釣りに釣られし鮎が終をきらめく　たつの市　内海　永子

201 独り寝の夜半に目覚めて耳朶を打つ雨の音にも和音のありて　豊岡市　能登かおる

227 蓋とれば鍋焼きうどんの湯気が出て向かいの妻を一瞬隠す　丹波市　井上　敏

238 頑丈なセキュリティの壁ＩＤを忘れて私と証明できず　高砂市　鈴木　裕子

247 あの日から始まる時を刻みゐる亡父の時計の電池を替へる　西宮市　加藤　直美

251 戯れに二十歳と記すアンケート甘やかな風ふわっと吹き過ぐ　洲本市　蛇持なみじ

269 まあいいか傷つく時は五秒間ポッケの柚子飴ひと粒なめる　洲本市　島田真知子

273 台風の兆しまだ無き裏庭に撓みて銀の蜘蛛の糸揺る　加西市　栗山実千代

294 独り言の多くなりたり胸のうちを吐きて答えて励ましている　加西市　山野　淑子